

〈入選〉

長野県 堀部さん（70代 女性）

私は今年七十一才になります。

この年になって、年金の大切さ、有難さを身にしみて感じている一人です。

主人が脳梗塞で倒れ、半身不随となり、長い闘病生活になった時、私にはやはり身体のきかない九十才近い母が居て、その上に、二十年前、高校生の時頸椎損傷で手足が不自由になってしまった息子がいました。

車椅子三人との生活がはじまりました。

生活の心配と看護で私が倒れてはと考え、福祉の相談を受け、まず主人を医療施設へ、母を介護老人福祉施設に入所させて、子供だけは今まで通り家庭で面倒を見る事にしました。さいわい主人は厚生年金を、母は遺族年金を受給していました。そして私と子供の生活は、息子の障害者年金と、私の厚生年金と、のほか、パート収入を充て、また、不足は貯金を崩しながら何とか生活ができ、全く贅沢はできませんが、生活の方針がたてられました。夫は身体が不自由でも頭はしっかりしていて、入所費や生活の心配ばかりしていましたが、年金で何とかなる事を伝えると安堵し、六年の闘病生活の末昨年亡くなりました。母も今年になってすぐ、九十五才で亡き人となりました。

年金の有難さは、寝たきりになっても、痴呆になっても、生きている限り、一生受給できることです。

私達家族は年金によって救われ、このような苦境な環境になっても何とか生活することができました。もし、年金制度がなかったら…と考えると、私達家族はどうなっていたかわかりません。

今、若い人は年金を納めない人があると聞きますが、老後の不安を少しでも補う為には、若い時に無理をしてでも年金を納め、老いた時にはその見返りがある、このすぐれた制度を活用して国民の義務を果たして欲しいものです。

七十を過ぎた私にとって年金は誠に有難い実のある制度であることをつくづく思うこの頃です。